

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00295

研究課題名（和文）戦後大阪の夕刊紙・華僑メディアと文学サークル・在日文学

研究課題名（英文）Evening Newspapers, Zainichi Chinese Media, Literature Circles and Zainichi Korean Literature in Postwar Osaka

研究代表者

宇野田 尚哉（Unoda, Shoya）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：50324893

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：1945年10月に大阪で創刊された夕刊紙『国際新聞』（1945～1959）は、中華人民共和国に好意的な華僑メディアとして、冷戦構造に由来する分断線をまったく報道を行った点に特徴を有する。『国際新聞』は、占領期からその後にかけて、主流のメディアとは異なる視点を当時の読者に提供した。また、大阪における革新系文化運動に関する記事を積極的に掲載したが、在日華僑だけでなく、在日コリアン（たとえばのちに在日コリアン文学を代表する詩人となる金時鐘など）にも日本社会にむけて発言する機会を与えた。このような意味では、『国際新聞』は、戦後在日コリアン文学の忘れられた起源の1つと位置づけることもできる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

敗戦直後の大阪で創刊された華僑メディア『国際新聞』は、占領期から1950年代にかけて、冷戦構造に由来する分断線をまったくかたちの特色ある報道を行うとともに、在日華僑のみならず在日コリアンの文化的営みをも支援し、戦後大阪における多文化的営みと基盤の一つとなったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The evening newspaper Kokusai Shinbun (1945-1959), launched in Osaka in October 1945, is noteworthy for how it crossed the borderlines drawn under the East Asian Cold War structure to cover the news as a Zainichi Chinese media outlet aligned ideologically with the People's Republic of China. It provided readers with perspectives differing from those seen in mainstream Japanese newspapers during and after the occupation period. Kokusai Shinbun was also active in covering news related to the progressive culture movements in Osaka, and gave not only Zainichi Chinese people but also Zainichi Koreans opportunities to express their ideas to Japanese society as a whole. For example, Kim Sijong, a poet who later became a major figure in Zainichi Korean literature, contributed his poems and essays to this media outlet in the 1950s. In this sense, Kokusai Shinbun can be said to be one of the forgotten origins of postwar Zainichi Korean literature.

研究分野：日本思想史

キーワード：『国際新聞』 華僑メディア サークル文化運動 在日文学 金時鐘

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者も編者の一人をつとめた、10年にわたる共同研究の成果論文集『「サークルの時代」を読む：戦後文化運動研究への招待』（宇野田尚哉・川口隆行・坂口博・鳥羽耕史・中谷いずみ・道場親信編、影書房、2016年）に代表されるように、敗戦後から1950年代にかけての、無名の人々による表現活動が、文学・歴史学・社会学など多様な領域の研究者の関心を集めてきた。本研究の学術的背景をなしているのは、本研究代表者自身が主導してきたこのような研究動向であり、本研究では、このような研究動向を、大阪という地域、敗戦から1950年代にかけてという時期、夕刊紙と文学サークル運動、華僑メディアと在日文学などをキーワードとしながら、さらに深めることを意図した。

2. 研究の目的

敗戦後の日本においては、占領軍がメディアについても集中排除の方針をとったため、都市部では朝刊紙とは別に夕刊紙が叢生し、多様な文化的営みの発火点となった。本研究の目的は、この時期に大阪で創刊された夕刊紙のなかでもとりわけ特色のある『国際新聞』に着目し、あわせて『夕刊新大阪』なども参照しつつ、このようなメディアに触発されるかたちで展開された無名の書き手たちによる文学的営みの射程を明らかにすることである。具体的に言えば、華僑メディアとしての特色を有する『国際新聞』は、当該期大阪の革新系文化運動に好意的であるとともに、1950年代後半には若き日の金時鐘をはじめとする在日コリアンの書き手たちに紙面を提供し、在日文学の起源の一つとなった。本研究では、『国際新聞』をはじめとする当該期大阪の夕刊紙に注目して、無名の書き手たちによる営みの総体的把握を試みるとともに、とりわけサークル詩運動と在日文学という観点から、その到達点を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

敗戦後から1950年代にかけての時期に大阪で発行された夕刊紙のうち、華僑メディアとしての特徴を有し当該期の革新系文化運動との関係も深かった『国際新聞』をはじめ、当該期のサークル文化運動と関係の深かった『夕刊新大阪』などを詳細に分析するとともに、当該期の関西で発行された在日華僑・在日コリアンによる雑誌等を幅広く収集・分析することにより、当該期の大阪におけるこれまで注目されてこなかった文化的営みに光を当てた。

その際、これまでのサークル文化運動研究のなかで蓄積されてきた成果を踏まえ、当該期の大阪におけるサークル文化運動の動向を踏まえ、そのなかで発行されたサークル誌等を幅広く発掘・分析することを本研究の方法的前提とした。たとえば、『国際新聞』の読者投稿欄を基盤として生まれ日本人・朝鮮人の詩人たちが協働したサークル詩誌『詩炎』（表紙は画家のタカハシノブオがデザインした）などの資料を発掘・紹介した。

4. 研究成果

占領下の大阪で1945年10月に創刊された華僑系新聞『国際新聞』は、戦勝国のメディアとして大量の用紙を確保できるという利害と絡まり合いながら展開し、経営が日本人の手に渡る危機を乗り越えて、1948年半ばには華僑メディアとしての実質を具えていった。その後中国において国共内戦が共産党優位で推移すると、国際新聞社内では新中国への共感が高まり、『国際新聞』はpro-communist的傾向をもった戦勝国メディアという独自の性格を持つに至る。とくに朝鮮戦争が勃発して『アカハタ』『解放新聞』『華僑民報』などが停刊処分になると、その独自性は際立つことになった。

『国際新聞』は、冷戦構造に規定されたさまざまな分断線を跨ぐような報道を行った点を特徴とする。朝鮮戦争が休戦を迎え、時代の論理が戦争と革命から平和共存へと転換していった際には、『国際新聞』は、この転換を象徴する中国紅十字会代表団の来日を報じるなど、重要な役割を果たした。このようにして、時代の課題が、戦争に勝利することや革命を実現することから、平和共存の枠組のなかで体制選択競争に勝利することへと移り変わるなかで、『国際新聞』は、中華人民共和国を支持し朝鮮民主主義人民共和国に共感を寄せる立場から、分断線を跨ぐ報道を行い、在日華僑の置かれている状況だけでなく在日朝鮮人の置かれている状況をも照らし出す役割を果たし、在日朝鮮人に発言の機会を与えるメディアともなった。

また、『国際新聞』は、戦後大阪における革新系文化運動とも関係が深く、同紙文化欄は戦後大阪のサークル文化運動に関する貴重な情報を豊富に含んでいる。とりわけ、当時発言の場を持たなかった在日朝鮮人の青年たちに発言の場を与えその文化的営みをサポートした点は特徴的

であり、若き日の金時鐘をはじめとする在日朝鮮人青年たちの同紙における表現活動は在日朝鮮人文学の忘れられた水脈の一つの評価することができよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宇野田尚哉
2. 発表標題 戦後大阪の華僑系新聞と在日朝鮮人：東アジア現代史のなかの『国際新聞』
3. 学会等名 国際日本文化研究センター共同研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 宇野田尚哉、坪井秀人、キアラ・コマストリ、川口隆行、木下千花、森岡卓司、鳥羽耕史、小杉亮子、ニコラス・ランブレクト、佐藤 泉、成田龍一、徐潤雅、高 榮蘭、村上克尚、石川巧、大塚英志	4. 発行年 2021年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 370
3. 書名 対抗文化史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------